

# 殺生石

楠山正雄

青空文庫



むかし 後深草天皇ごふかくさてんのうの御代みよに、玄翁げんのう和尚おしょうという徳とくのたか高い坊ぼうさんがありました。日本にっぽんの国くに中ちゆう方ほう々ぼうめぐり歩いて、ある時とき奥州おうしゆうから都みやこへ帰かえろうとする途とちゆう中ちゆう、白河しらかわの関せきを越こえて、しもつけしもつけの那須野なすのの原はらにかかりました。

那須野なすのの原はらというのは十里り四方ほうもある広いひろ広い原はらで、むかしはその間あいだに一軒けんの家いえも無く、遠とおくの方ほうに山やまがうつすり見えるみばかりで、見渡みわたす限かぎり草くさがぼうぼうと生おい茂しげつて、きつねやしかがその中なかで寂さびしく鳴ないているだけでした。玄翁げんのうはこの原はらを通とおりかかる

と、折おりふし秋あきの末すえのことで、もう枯かれかけたすすき尾花おぼなが白しろい綿わたをちらしたように一面めんにのびて、その間あいだに咲さき残のこった野菊のぎくやおみなえしが寂さびしそうにのぞいていました。

玄翁げんのう和尚おしょうは一日いちにち野原のはらを歩あるきどおしに歩あるいてまだ半はん分ぶんも行まかないうちに、短みじかい秋あきの日ひはもう暮くれかけて、見みる見みるそこらが暗くらくなつてきました。この先さきいくら行いつても泊とまる家いえを見みつけるあてはないのですから、今夜こんやは野宿のじゆくをするかくごをきめて、それにして、せめて腰こしをかけて休やすめるだけの木の陰かげでもないかと思おもつて、夕ゆうやみの中でしきりに見みましたが、一本ほんのひよろひよろ松まつさえ立たつてはいませんでした。それでもと思おもつてまた少すこし行いつてみると、草原くさはらの真まん中なかに、大きな石いしの立たつているのが白しろく見みえ

ました。

「やれやれ、これで露をしのぐだけの屋根が出来た。」

と玄翁げんのうはつぶやきながら石のそばに寄つてみますと、ちょうど人間にんげんの背せいの高たかさぐらいのすべすべしたきれいな石でした。玄翁げんのうは石の頭あたまに笠かさをかぶせ、草くさを結むすんでまくらにして、つえをわきに引ひき寄よせたまま、ころりと横よこになりますと、何なにしろくたびれきつているものですから、間まもなくとろとろと眠ねむりかけました。

するとしばらくして、眠ねむっているまくら元もとで、

「和尚おしょうさま、和尚おしょうさま。」

とかすかに呼よぶ声こえがしました。初はじめは夢ゆめうつつでその声こえを聞きいていましたが、ふと気きがついて目をあけますと、もう一面いちめんの真ま

つ暗くらやみで、はるかな空そらの上で、かすかに星ほしが二つ三つ光ひかつてい  
るだけでした。

「すると今いましがただれか呼よんだと思おもつたのは、氣きの迷まよいであつた  
か。」と玄翁げんのうは思おもつて、起おき上あがりもしずに、そのまま目めをつ  
ぶつて寝ねようとししました。するとまたうしろの方ほうで、こんどは前まえ  
よりもはつきり、

「和尚おしょうさま、和尚おしょうさま。」  
と呼よぶ声こえがしました。

こんどこそ間違まちがいはないと玄翁げんのうが思おもつて、ひよいと起おき上あが  
りますと、どうでしょう、さつきの石いしのあつた所ところがほんのり明あか  
くなつて、そのかすかな光ひかりの中に若わかい女むすめのような姿すがたがぼんやり見み

えていました。

玄翁げんのうもさすがにびっくりして、その女に向むかつて、

「呼よんだのはあなたですか。あなたはどなたです。」

とたずねました。

すると女はかすかに笑わらったようでしたが、やがて、

「びっくりなさるのはむりはありません。わたしはこの石の精せいです。」

といいました。

「その石の精せいがどうして迷まよって出て来きたのです。何なにかわたしに御ご用ようがあるのでしよつか。偶ぐうぜん然ぜんながら、こうして一ひと晩ばんのお宿やどを願ねがったお礼れいに、何なにかして上あげることがあれば何なんでもしませう。」

と玄翁げんのうはいいました。

すると女なみだは涙をはらはらとこぼして、

「あなたあは有り難がたいお坊様ぼうさまのようですから、くわしくわたしの話はなしを聞いて頂いたいて、その上じやうにお願いねがいがあるのでございませう。お聞ききになつたこともあるでしょうが、じつはわたしは、むかしながしの院いんさまの御所ごしよに召めし使つかわれた玉藻前たまものまえという者ものでございませう。もとをいいますと天竺てんじくの野のに住すんだ九尾びのきつねでした。きつねは千年ねんたつと美しい人にんげん間の女むすめに化ばけるものです。わたしも千年ねんの功こうを積つむと、きれいな娘むすめの姿すがたになりました。するとある日てんらく天羅国はんそくの班足王はんそくおうという王おうさまが狩かりの帰かえりにわたしを見みつけて、御殿ごてんに連れ帰かえつてお后きさきになさいました。わたしは長い間ながあいだき



つねでいた時分人間にいじめられとおしてきたことを思い出して、ふと悪い心がおこりました。そこである時天羅国にいろいろと天災がおこつて人民が困つていと、わたしは班足王にすすめて、これはお墓の神のたたりですから、これから毎日十人ずつ人の首を切つて、百日の間に千人の首をお墓に供えてよくおまつりなさい。きつと災いをのがれることができますといいました。じつは天災というのもわたしが術をつかつてさせたのですが、王はこれを知らないものですから、わたしのいうとおり、毎日日罪のない人民を十人ずつ殺して、千人の首をまつりました。すると人民が王をうらんで、ある時一揆を起こして王を攻め殺しました。そしてわたしを見つけて、生け捕りにしよう

ときわぎました。わたしはとうに逃にげ出だして、山の中にかくれま  
した。そうして何なん百年ねんかたちました。

## 二

そのうちわたしはまたシナの国くにに渡わたつて、殷いんの紂ちゆう王おうとい  
もののお妃きさきになりました。あの紂ちゆう王おうにすすめて、百ひやく姓しやうか  
ら重おもいみつぎものを取り立たてさせ、非道ひどうの奢おごりにふけつたり、罪つみ  
もない民たみをつかまえて、むごたらしいしおきを行おこなつたりした姐だつき妃  
というの、わたしのことでした。紂ちゆう王おうがほろぼされると、  
わたしはまた山の中にかくれて、何なん百年ねんか暮くらしました。

おしまいに日本にっぽんの国くにに来て、院いんさまのお召めし使つかいの女つかになつて、玉藻前たまものまえと名なのりしました。わたしをおそばへお近づちかけになつてから、院いんさまは始しじゅう終おも重いいお病やまいにおなやみになるようになりました。院いんさまのお命いのちをとつて、日本にっぽんの国くにをほろぼそうとしたわたしのたくらみは、だんだん成じようじゆ就ししかけました。それを見破みやぶつたのは陰陽師おんみようじの安倍あべの泰成やすなりでした。わたしはどうとう泰やすな成りのために祈いのり伏ふせられて、正しょうたい体たいを現あらわしてしまいました。そしてこの那須野なすのの原はらに逃にげ込こんだのです。けれども日本にっぽんは弓矢みやくにの国くにでした。天竺てんじくでも、シナでも、一度ど山やまか野のにかくれればもうだれも追おいかけて来くる者ものはなかつたのですが、こんどはそういきませんでした。間まもなく院いんさまは三浦みうらの介すけと千葉ちばの介すけと二人ふたり

の武士ぶしにおいいつけになつて、何百騎なんきさむらいの侍で那須野なすのの原はらを狩り立かたててわたしを射いさせました。わたしはもう逃げ道にみちがなくなつて、とうとう二人ふたりの武士ぶしの矢先やさきにかかつて倒たおれました。けれども体からだだけはほろびても、魂たましいはほろびずに、この石このいしになつて残のこりました。

わたしの根ねぶかい悪あく念ねんは石いしになつてもほろびません。石いしのそばに寄よるものは、人ひとでも獣けものでも毒どくにあたつて倒たおれました。みんなはせつしようせき

殺生石せつしようせきといつて、おそれてそばへ寄よるものはありませんでした。それが今夜こんやあなたに限かぎつて、殺生石せつしようせきのそばに夜よを明あかしながら、何なんにも災わざわいのかからないのはふしぎです。これはきつとほとけ仏ぼつさまの道みちを深ふかく信しんじていらつしやる功徳くどくに違ちがいありません。あなたのような尊とうといお上しやうにん人ひとさまにお目めにかかつたのは、わたし

のしあわせでした。どうかあなたのあらたかな法力ほうりきで、わたしをお救すくいなすつて下さいませんか。わたしはもう自分じぶんながら自分じぶんの深い罪ふかと迷まよいのために、このとおり石になつてもなお苦しんでくるいるのでございます。」

こういつて、女はほつとため息いきをつきました。

玄翁げんのうはだまつて、じつと目をつぶつたまま、女の話はなしを聴きいていました。やがて女の長い話なががおしまはなしいになりますと、静しずかに目をあいて、やさしく女の姿すがたを見みながら、

「うん、うん、分わかった。わたしの力ちからの及およぶだけはやってみよう。安心あんしんして帰かえるがいい。」

といました。

女はにっこり笑つて、すつとかき消すように見えなくなりま  
た。

そうこうするうちに、いつか夜がしらしら明けはなれてきまし  
た。玄翁ははじめてそこらを見回しますと、石はゆうべのまま  
に白く立っていました。見ると石のまわりには、二三町の間ろく  
ろく草も生えてはいませんでした。そして小鳥や虫が何千となく  
重なり合つて死んでいました。

玄翁は今更殺生石におそろしい毒のあることを知つて、  
ぞつとしました。

もうすっかり明るくなつて、日が昇りかけました。草の上の露  
がきらきら輝き出しました。

玄翁げんのうは殺生石せつしようせきの前に座まへすわつて、熱心ねっしんにお経きようを讀よみました。  
 そして殺生石せつしようせきの靈れいをまつつてやりました。殺生石せつしようせきがかす  
 かに動うごいたようでした。

やがてお経きようがすむと、玄翁げんのうは立ち上あがって、呪文じゆもんを唱となえな  
 がら、持もつていたつえで三度石さんどをうちました。すると静しずかに石は  
 真まん中なかから二つにわれて、やがて霜しも柱ばしらがくずれるように、ぐ  
 さぐさといくつかに小さくわれていきました。

その後旅のちたびの人が殺生石せつしようせきのそばを通とおつても、もう災わざわいはおこ  
 らなかつたそうです。





# 青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 殺生石

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>